

第4回 内視鏡検査は何年に1度受ければよいのでしょうか？

胃内視鏡検査について

胃癌検診としては、バリウム検査(胃透視)を毎年施行している場合が多いようです。胃透視は長年に亘り胃癌早期発見に多大な貢献をしてきましたが、経鼻内視鏡の登場により精度、受容度、マンパワーの面から名実共に内視鏡検査が胃癌検診の第一選択になったといえるでしょう。それでは、全員胃内視鏡検査を毎年1回受けるべきなのでしょうか？胃癌発症の大前提はピロリ感染であり、ピロリが感染する3歳以下で感染を免れたピロリ陰性者は胃癌発症はほぼ零に等しいことが判明しており5年に1回めどの内視鏡検査でよいと考えられています⁽¹⁾。50歳以下ではピロリ陰性者が過半数を上回っており、ご自身がピロリ陽性か陰性かを知っておくことは非常に重要で、採血でできるピロリ抗体とペプシノゲン検査の組み合わせでもほぼ状況の評価できます⁽¹⁾⁽²⁾。一方、ピロリ除菌治療で胃癌のリスクが3分の1に減少することが2008年8月2日付のLancet誌に報告⁽³⁾されましたが、胃癌は早く進行する病変があること、除菌後も胃癌リスクが零(ピロリ陰性者レベル)にならないことから、除菌者を含めたピロリ陽性者では、極めて軽度の萎縮でなければ1年に一度の内視鏡検査を目標にした慎重な対応が必要と考えています(報告1では萎縮の程度により1~3年に1度を具体的に指示していますが)。また5年に1度めどの内視鏡検査としたピロリ陰性者でも、有意なバレット食道(上皮)や逆流性食道炎を指摘されている方は、噴門部胃癌や食道腺癌のリスクを念頭に検査間隔を考慮する必要があることを留意ください。

癌年齢(40歳以上)での内視鏡検査間隔のめど

【胃内視鏡】

胃癌予防は早期のピロリ除菌

- 胃癌切除又は既往
- 腸上皮化生又は高度萎縮
- 高度の逆流性食道炎又は高度のバレット食道
- ピロリ除菌者で萎縮軽度
- ピロリ陰性者で逆流性食道炎バレット食道 共に軽度
- ピロリ陰性者で逆流性食道炎バレット食道 共になし又は軽微のみ

1年後(以内含)リスク大

2-3年後リスク小

5年後リスク稀

【大腸内視鏡】

大腸癌予防は腺腫切除

- 大腸癌切除又は既往
- 複数の腺腫切除
- 単数の腺腫切除
- 複数の腺腫切除既往
- 大腸癌家族歴あり
- 腺腫切除なし(既往もなし)かつ大腸癌家族歴なし

※「ピロリ陰性者」は生来陰性を指し除菌者は含まれない
 ※腺腫:腫瘍性病変(癌につながる可能性を有した病変)
 (ポリープは隆起病変の総称だが、腺腫は平坦や陥凹型もある)

大腸内視鏡検査について

大腸癌検診としては、大腸のバリウム検査(注腸)、大腸内視鏡検査ともに受容度、マンパワー共に限界があることから、便潜血検査で対応しているのが現実といえます。しかし便潜血では大腸癌検診として不十分であり、大腸癌の予防には、前段階である腺腫(隆起する病変をポリープと総称)を切除することが非常に重要です。大腸内視鏡専門施設では検査時に病変を即時切除することが可能であり、所要時間も数分で処置できますので、腺腫と判断できれば小さくとも全て切除する=クリーンコロンを目指すべきであることは、既に本シリーズでお話して来ました⁽⁴⁾。それではクリーンコロンになれば何年に1度大腸内視鏡検査を受ければよいのでしょうか？幸い胃癌と異なり、大腸ポリープ(腺腫)のほとんどは進行が極めて遅いことから、ポリープ(腺腫)があってもクリーンコロンが確実に達成できれば大腸内視鏡検査は3年に1度のめどでよいと考えられます。しかし大腸検査でもっとも有用な内視鏡検査でも大腸の曲がり角や壁の裏側などに隠れた小さな病変が同定できない場合が専門施設でも3割程度はありとされています⁽⁵⁾。従って、複数のポリープ(腺腫)を切除した方、大腸癌の家族歴を有する方は1~2年後にお受けいただき、隠れた小病変がないかのチェックが必要と考えています。大腸癌家族歴がなく残便がない条件の良い大腸内視鏡検査状況で、単発のポリープ(腺腫)切除では3年に一度、ポリープ(腺腫)がなかった方は5年に一度が妥当なところではないかと考えています。

青山内科クリニック 胃大腸内視鏡/IBDセンター

「患者様本位」を信条に内視鏡・炎症性腸疾患・ピロリ菌を中心とした専門領域の最新医療をきめ細かく提供しています。

神戸市中央区多聞通3-3-9神戸楠公前ビル5F
 TEL:078-366-6810 FAX:078-366-6811
 HPURL <http://www.aoyama-clinic.com>
 e-mail info@aoyama-clinic.com
 日曜日、祝日、木曜日、第2・4土曜日終日、
 第3火曜日午後休診
 阪急/阪神/山陽接続「高速神戸」駅(東口)
 JR神戸駅徒歩3分



院長 青山伸郎

電話、ファックス、メールで予約をお受けしています。詳しくはホームページをご覧ください。

【院長略歴】
 神戸大学医学部准教授・光学医療診療部(内視鏡部)部長を経て2007年5月青山内科クリニック(胃大腸内視鏡/IBDセンター)を開設。西宮市立中央病院医務顧問(内視鏡センター担当)、南大阪病院内視鏡センター顧問。